

# 横笛の転生

——中世説話の変容とその本文——

小林 美 和

## はじめに

建礼門院雑仕という身分の低い女を愛したが故に、親の不興をかい、親と女との板挟みに苦しんだ末、男は出家の道を選ぶ。女は、男の跡を慕ってその庵室を訪ねるも対面を拒まれ、悲嘆のあまり出家したが、間もなく死んでしまう。

平家物語の一節に名高い、この滝口と横笛の悲恋の物語は、はやくから人口に膾炙したものであったらしい。平家物語の一異本、源平盛衰記は、この滝口説話を述べる中で、「異説まち／＼なり」として、本話のヴァリエーションを紹介しており、当時、すでに巷間、諸説が行なわれていた状況を示唆している。この物語については、明治二十七年、高山樗牛が擬古文を以て『滝口入道』を著したことに代表されるように、近代に至っても改作の手が加えられており、その命脈の延々たるを思わせるものがある。

盛衰記にいう「異説まち／＼なり」とは、盛衰記編纂の時点において、この物語の改作の歴史を集約した言葉に他ならないであろう。こ

の段階で、すでにこのような状況である以上、今日において、この物語の変容の跡を正しく辿ることは、殆ど不可能といつてよいであろう。口承の世界のままに埋没していった滝口・横笛の物語も多からうと推測されるからである。したがって、現在に伝わる横笛説話の数々も、その改作の歴史の一面を留めるにすぎないのかもしれない。

本稿は以上のような前提に立って、平家物語の当該説話を始めとする中世の横笛説話を対象として、中世における説話の変容と本文の流動の状況を瞥見することを当面の目標とするものである。考えてみなければならぬのは、この物語の発生の問題であると同時に、時代時代の改作者が、この物語に持ち込んだ、それぞれの意匠ともいべきものである。それぞれの改作者が、この物語に何を読み取ったか、或いはこの物語をもとに何を語ろうとしたか。

## 一 へ刺るまではVの歌の解釈をめぐって

中世の横笛説話は、大きく分類すると、横笛の出家後の病死を説く出家型と、その桂川入水を説く入水型とに分類される。語り本平家物

語諸本、あるいは南都本平家物語等は、前者の型を示し、盛衰記・四部合戦状本・長門本平家物語、或いは室町物語の横笛草紙等は桂川での入水を語っている。その中であって、延慶本平家物語のみは、横笛の出家後の入水を説いており、松本隆信氏はこれを両型の折衷型とされた。そして、この両型相互の関係については、神野藤昭氏が、出家タイプから入水タイプへという流れを推定し、横笛を哀惜する思いの深まりという点に、その移行の「必然性」を認められた。一方、岩瀬博氏は、「唱導の原質性」という観点から、入水型が本来的なものとした。さて、ここでは、出家型の展開を示す語り本平家物語が一樣に記す、滝口と横笛の歌の贈答について考えてみたい。往生院訪問後、横笛が奈良法華寺（屋代本は寺名を記さない）で出家したと伝え聞いた滝口は、高野から一首の歌を贈り、それに対して横笛も返歌を詠む。即ち、

〔滝口〕剃るまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に入ぞうれしき

〔横笛〕剃るとてもなにかうらみんあづさ弓ひきとむむべき心ならねば

というものである。

ところで、この贈答歌については、はやく佐々木八郎氏が「しっくりしない歌」と歌意の不明瞭さを指摘、むしろ盛衰記が「異説」として伝える、

〔滝口〕しらま弓そるを恨みと思ふなよ真の道にいれる我身ぞ

〔横笛〕白真弓そるを恨みと思しにまことの道に入るぞ嬉しき

という贈答歌や延慶本のそれが明快であるとされた。そして、語り本

の贈答歌については、服部幸造氏も佐々木氏同様、歌意の不徹底を指摘される。

そこで、試みに現行の平家物語注釈書数点から、その歌意が問題となる滝口詠歌の解釈を摘記してみる。

(1) 私はあなたが髪をそって尼になるまでは悲しんでいたが、今はあなたも仏道に入ったとは嬉しいことである。△岩波古典大系▽。

(2) 私は出家するまでは憂き世を恨みましたが、あなたも仏道に入ったと聞いて、まことにうれしく思っています。△平家物語全注▽。

(3) 髪を剃り尼になるまでは私を恨んでいたが、そのあなたも尼になって、真の道（仏道）にはいったと聞いてうれしい。△小学館日本古典文学全集▽。

(4) 髪を剃り出家するまでは憂き世を恨んでいた私だが、あなたも尼となって真実を求める仏道に入ったと聞いて、うれしく思っている。△新潮古典集成▽。

さて、以上を見るに、下の句については、諸注はほぼ同様の解釈を与えているものの、こと上の句に関しては、注釈者によってその解釈はまちまちであるといつてよい。即ち、「剃る」とは△誰の▽行為か。また△誰が▽△誰（何）を▽「うら」むのかという、基本的文脈の理解において、すでに一致をみていないわけである。まず(1)(3)は△剃る▽という行為を横笛のものとし、(2)(4)は滝口の行為としている。△恨む▽主体については、(1)(2)(4)は滝口とするが、(3)はこれを横笛として

いる。また、△恨む△対象については、(2)(4)は「憂き世」、(3)は滝口とし、(1)は△恨む△対象を明確に示さず、「悲しんでいた」と言い換えている。

つまり、この歌に関しては、注釈者によって、解釈にかなりの揺れが見られるわけであり、定説を見ないということであろう。しかも、これらに示された解釈はいずれも、それぞれに問題を含んでいると思われる。まず、(1)については、△恨む△の語を「悲しんでいた」と置換することが妥当かどうか、また、横笛の剃髪が、滝口の「悲し」みを解消させる因果関係が明瞭でない。(2)(4)は、ほぼ同様の解釈を示しているが、上の句における剃髪の主体を滝口とすることで、一種の論理的破綻が生じる。即ち、滝口が剃髪したのは、横笛の往生院訪問以前のことであり、滝口の剃髪以前の心情と、一定時間経過後の横笛の出家により生じた心情を因果関係で結ぶことはできない。わかりやすいいえば、横笛の出家という行為が、過ぎ去ってしまった時点における滝口の△恨み△を解消することはない。(3)は、△恨む△主体を横笛とする点において、基本的な問題を抱えている。△私を△ではなく△私は△とすべきであることは自明のことであろう。

以上、現行の諸注を取り上げ、その問題点を指摘したのは、けっしてこれらの注釈としての価値を貶めるためではない。そうではなく、現代の平家物語研究の諸権威を迷わしめるほどに、この歌には問題が多いという点を指摘したいがためである。

ところで、この歌の不可解さとは何に基づくものであろうか。この歌を素直に読むかぎりにおいて、△剃る△主体は横笛であり、△恨む△主体は滝口であらねばならない（なぜならば、この歌は横笛の出

家を伝え聞いたことを契機として、滝口が横笛に贈ったものだから）。しかし、そうであるとすれば、滝口が△恨む△とはどのようなことか。この歌の解釈を難しくしている最大の問題点はここにあるであろう。△恨む△したのは横笛のはずなのに、滝口が△恨む△とは何事かというわけである。

しかも、語り本平家諸本において、この贈答歌には表現の変化がみられず、ほぼ完全に固定しているといつてよい。一般に、平家物語本文の流動は、語り本系テキスト間において減少し、本文の権威化的現象がみられるが、その意味で、この贈答歌の詞章は、一つの権威の輝きを帯びているといえる。しかし、それにしても、少なくとも語り本諸テキスト成立の段階においては、この歌の解釈に関して、今日のようないま、それを明らかにする根拠を示すことはできないが、それを一

考してみる必要があるように思われる。滝口が△恨む△とすれば、何を△恨む△んだのが、まず問題となる。滝口が△恨む△対象は、文脈上、横笛とするのが自然であろう。しかし、一言の断りもなく出家し、横笛を悲嘆の底に沈ませ、なおかつ、これをすげなく追い返した滝口に、横笛を△恨む△だけの正当な理由が果たしてあるのだろうか。しかし、そのような疑問は、現代の評者がほぼ無意識にそこに立たされている、いわば近代的な男女観に発するものではなからうか。

中世における男女の関係は、こと恋愛に関しては、そこに平等の観念を見出すことができない。詳しくは、別稿<sup>(7)</sup>で述べたので、ここで繰り返すことはしないが、夫の浮気による三角関係のもつれといった状況すら、妻の嫉妬心にその責が帰されるような精神風土<sup>(8)</sup>の中では、滝

口にも八恨むVに足る十分な根拠が存したのである。

滝口が親の恩と女への愛との板挟みという状況を八善知識Vとして出家をしたからといって、それによって一挙に超俗の聖人となったと錯覚してはならないであろう。そのあたりについては、たとえば延慶本が往生院隠棲中の滝口に、

世を厭ひ浄土を願う墨染の有繋がにぬるゝ袖の上哉

と独詠させている点や、古写本の横笛草紙(清涼寺本)<sup>(9)</sup>において、同宿の僧に「愛別離苦に苦しみ」を言い、

飽かぬ中を思ひきり、世を厭へども、飽かで別れし、横笛の、寝れば夢に見え、さむれば面影に立ちたまひて、忘れもやらぬはかなさよ。

と、横笛への飽かぬ思いを語らせている点などに、より明瞭に表れている。つまり、滝口の心はいまだ横笛への思いに揺れているのであり、それなくしては、

あかで別し女に此すまひをみえて候へば、たとひ一度は心つよくとも、又もしたふ事あらば、心もはたらき候ぬべし(覚一本)。

という滝口の台詞は発せられ得ないであろう。

滝口の八恨みVは横笛へのこの飽かぬ思いと深く関わっている。その思いが持続している以上、出家としての境遇は、いまや禁断のものとなった恋への思いを募らせ、かえってその内部における横笛の像を肥大化させる。つまり、滝口を苦しめているのは、横笛なのである。

八恨みVが、対象への深い執心の持続の意とすれば、八恨Vまれるべきは、滝口であると同時に、横笛でもある。

室町物語の横笛草紙の諸本では、往生院を訪れた横笛に、滝口に対

する恨み言を次のように語らせている。

さても自ら契るとして親の不孝を蒙りて、自らを恨みさせ給ふもことわりとは思へども、また自ら深き思ひに沈みもし、そなたゆへと思ふば、たがひに恨みにて、つきせぬなり(慶大本)<sup>(10)</sup>。

横笛はここにおいて、この恋が原因で親の不興を蒙った滝口が、自分を八恨むVのはもつともであるが、自身も滝口への深い思いに沈んだが故に滝口を八恨むVと述べている。両者はまさに八たがひに恨むわけであり、この物語の本質は、おそらく横笛と滝口のこの八恨みV即執心を説く点にある。これが、恋の物語たる所以である。

そして、語り本平家諸本は、両者の歌の贈答によって、相互の八恨みVの解消を図っているといえる。即ち、横笛の出家(女性であることとの放棄)によって、滝口は、はじめてその八恨みV即執心から解き放たれ、横笛もまた自ら出家することによって滝口への思いを断ち切ることになる。しかし、それが本当の意味での解消であったかどうかは、横笛の八おもひのつもりVの死という結末が自ずと物語っているであろう。

## 二 八恨むV女

藤原師家には相思の女がいて、そこに通っていた。しかし、その足は次第に遠退き、ついに絶えてしまった。半年後、その女の家の前を通りかかった師家は女に招き入れられる。折から女は法華経を誦読しており、師家はかつては気が付かなかった女の意外な美しさに心を動かされる。しかし、女は読経が終わると、師家の無沙汰を

恨む言葉を残して息絶える。それから間もなく師家も死んでしまった。女の霊が取り殺したということであった。

これは、今昔物語集卷三十一所収の「右少弁師家朝臣女に値ひて死したる語第七」という話である。男の離れ離れを恨んで死んでいった女の霊が、男を取り殺したという話と、一応は要約し得るであろうが、しかし、なお検討すべき要素を残している。

今昔物語集の編者は、説話の末尾において、

其の女最後に法花経を読み奉て失にければ、定めて後世も貴からむと人も見けるに、弁を見て深く恨の心をして失けるにこそは、何に共に罪深からむとぞ思ゆる。<sup>11)</sup>

という批評を付している。即ち、女の霊に殺された男という出来事の異常さはすでに本編で尽くされているという判断からか、ここにおいて編者の関心は、むしろ師家に「今は此れを恨みて」との言葉を残して死んでいった、女の「罪深」さに向けられている。

ところで、女が死の直前まで読誦していた法華経は、代表的な滅罪教典として知られている。<sup>12)</sup> おそらく、女は男の夜離れを妬む自らの執心の罪深さを法華経読誦の功德によって清め、自ら繰り返し誦み上げた同経薬王品中の「青蓮花中宝座之上」に転生することを願ったのであろう。しかし、男との偶然の再会によって、執心の炎が再び燃え上がり、九切の功を一簣に欠くという結果となってしまう。女の霊はどこに行ったのであろうか。

ここからは、女の執心の深さが、その往生を妨げるといふ説話の論理構造が読み取られるが、横笛の物語においても、滝口と横笛の和解

を語らず、専ら横笛の△恨み▽を中心に説くものがあることに注意しておきたい。盛衰記・四部本・長門本、室町物語の横笛草紙等、横笛の入水を説くものがそれである。そして、そうした物語の輪郭を最も鮮明に表しているのは、中でも室町物語の横笛説話であるといつてよい。<sup>13)</sup> 室町物語の本話は、随所にこの期の物語にふさわしい趣向（たとえば横笛の法輪寺通夜、虚空蔵菩薩の示現等）を折り込みながら、一貫して横笛の△恨み▽の物語としての性格を示している。

往生院訪問の場面で、語り本平家の横笛が、滝口に対して一言も発せぬまま、△ちからなう涙をおさへて▽（覚一本）帰ってゆくのに比し、室町物語の横笛は、連綿とその△深き思ひ▽△恨み▽の言葉を投げ掛け、遂にその場に泣き崩れる。この対比は、両者の横笛説話を比較する上で重要である。それが、その後の横笛の行動と響き合っているからである。前者の横笛は、自らの激情を押し包んで、出家を遂げ、後者はその激情のままに、あたりをさまよい、大堰川の千鳥ヶ淵に身を投じる。

よく／＼物を案ずるに、よしなのわが心やな、鮑の貝の片思ひ、人はかほどにつれなきを、思ふもくるし。とにかくに、つれなきいのちのあれはこそ、あかぬ別れも恋しけれと、たゞ一すぢに思きり（慶大本）

とは、その時の横笛の心中描写である。

そして、横笛の入水を聞いた滝口は、大堰川に駆け付け、横笛の亡骸を掻き抱いて、髪を撫でながら、

むぎんの物の有様や、かくあるべきと知るならば、なかかわ見もし見多ざらん。さこそ草の陰にても恨み深く思ふらん

と横笛の△思ひ▽の深さを今更ながらに覚り、後悔の涙を流すことになる。そして、

いまこそ恨みの淵に沈むとも、わが命のあらん程は、後生は弔ひ申すべし。

と、一生をかけて横笛の後生を弔い、その△恨み▽を鎮めることを誓っている。滝口を高野へ向かわせたのは、この悔恨の念であり、その思いの強さが、滝口を「世にたつとき」聖とする。室町物語の横笛説話からこのような物語の構造が浮かび上がってくる。その意味で、物語構成上における横笛・滝口相互の関係は他本に比して、より緊密である。

前掲の今昔物語集の説話でも明らかのように、深い思い即△恨み▽を残して死んでいった女が往生を遂げることは難しい。横笛草紙における滝口の法華経読誦のモチーフが重要な意味を持つのは、この地点においてである。

『発心集』第三に、桂川に入水した、蓮花城という聖の話がある。死期の遠からざるを悟った蓮花城は、正念にての最期を入水という行為で果たさんとし、「桂川の深き所」の水底に身を沈める。ところが、死後、その最期を見取った登蓮法師のもとに蓮花城の怨霊が登場し、自らの入水の際に、なぜ引き止めてくれなかったかと恨み言をいうというものである。桂川が当時入水の場であったことが、これによっても知られるであろう。保元物語において為義の北方が自らの髪を沈め、その後入水して果てたのも、この桂川の「深き所」であった。このような所に、死者たちの怨念が籠もらないはずはあるまい。たとえば中世本地物語の一大集成ともいべき神道集には、いくつかの女人

入水譚が見える。このうちの「赤城大明神事」の淵名姫の入水譚に関連して、福田晃氏は、こうした入水の地に、かつて横死者の「怨霊鎮定の行儀」がなされた「斎場」の面影を読みとっておられる。

さて、横笛の△恨み▽の物語としての本話は、また独自のヴァリエーションを生み出している。現存の横笛草紙の中では、最も書写年代が古いとされる清涼寺本がそれである。清涼寺本は物語の冒頭で、横笛の出自を次のように語っている。

横笛は、摂津国神崎の遊君の長者の娘・侍従の子として生まれた。侍従は恋の相手を求めて、鞍馬山に祈願をする。その夜の夢中に、みぞろが池で邂逅する人物と契りを結ぶべしとの示現がある。示現の通り、侍従はみぞろが池のほとりで男に出会い、契りを結ぶが、男の正体に不審を抱いた侍従は、男の狩衣に針を差して跡を付け、その正体が大蛇であることを突き止める。男は、鞍馬の多聞天の少将と名乗り、みぞろが池の大蛇であることを打ち明け、侍従に青葉の笛を残して死ぬ。侍従は女の子を産み、横笛と名付けるが、これを捨てる。横笛は、三輪の山中で育ち、十五の年御室の御所に参る。その後、清盛が福原に出掛け、神崎に一夜の宿をとった時、横笛を見出して都に連れ帰る。その後横笛は、建礼門院に仕える。これは室町物語の横笛草紙の中でも、清涼寺本に独自にみられるモチーフといつてよい。いわゆる三輪山型の説話が導入されているわけであり、中世文芸において深泥池の大蛇を説く類縁については、すでに徳江元正氏の論がある。そして、興味深いことには、徳江氏も指摘されるように、清涼寺本は、挿入説話の形で、さらに「ちやうあんの

姫宮」と「おたの川の大蛇」との蛇簪入型説話を記している。いわば、この型の説話に執しているとも見られるわけであるが、この点について徳江氏は、「もともと、横笛の父を大蛇とすると、なんらの必然性もない」として、「多分、中世のある時期の好みを反映して、はなしの筋を奇怪に興深くするため、借りてきた趣向なのであったろう」とされている。

徳江氏の指摘は、横笛草紙の諸本中における清涼寺本のこのモチーフの独自（孤立）性を考慮すれば、妥当な見解といえようが、横笛の入水という結末との響き合いという観点からすれば、そこに物語の一つの意匠が透けて見えてくる。今昔物語集の編者が、嫉妬深い妻を語った説話の末尾で、

嫉妬は罪深き事也。必ず蛇に成にけむかしとぞ人云けるとなむ語り  
伝へたるとや。

と記すように、執心は女をして蛇体へと変身させる。道成寺縁起を引き合いにだすまでもなく、このような発想は、中世説話の論理構造のかなり基底部分に位置しているといつてよい。

一身に八恨みV即執心を抱いた横笛が大堰川の千鳥ヶ淵に身を投じた時、そこに蛇体に変じた姿をイメージしたとしても、それはむしろ自然のなりゆきというものであろう。深泥池の大蛇の子であった横笛は、いわば、蛇身へと回帰を遂げたのである。

### 三 八覗くV男

中世における説話の変容、その多様さの一端は、この横笛説話にも

明瞭に見て取れる。しかし、それは、相互に何の脈絡もなく無制限に変化してゆくという体のものであるまい。一つの説話の変容の背後には、何らかの変容の論理ともいべきものが存在するのであろう。しかし、それは変化する側面と同時に、変化せざる側面をも注視することによって、はじめて見えてくるもののように思われる。しかし、中世における横笛説話変容の輪郭を描き出すなどということは、到底この小稿の手にあまることであり、ここでは、一部本文の流動について考えてみたい。そこからは、この説話の変容史における微妙な一面を垣間見ることができるよう思われる。

たとえば、岩瀬博<sup>10)</sup>氏は横笛説話の本文について、横笛草紙、平家物語はそれぞれ口頭伝承の瀧口横笛説話を素材として、そのテキスト化を図ったのが現存本であるとし、平家物語を典拠とし、それを変形、脚色して横笛草紙が成立したという考えはゆるされないとされた。そして、その根拠として、おもに両者の類似語句の少なさを挙げられる。いま岩瀬氏の論を引き合いに出すのは、氏が到達された結論の当否をあげつらう意図からではない。氏の論のスタイルが一つの典型を示していると思われるからである。即ち、氏の論に占める八口頭伝承Vという概念の優位性を指摘したいがためである。我々が中世の文芸に魅力を感じる大きな理由の一つは、まさにその口承的性格にあるといえるであろう。この横笛説話においても、平家物語諸本および室町物語の当該説話は、内容のレベルでも、表現のレベルでも、相互の間隔は大きいといえる。八口頭伝承Vという概念が導入される所以であろう。

しかし、それにしても、現存する諸種の横笛説話全体を一つの土俵

に引き込むかのような、本文の微妙な交錯の相には、この説話の変容の歴史を考える上で、無視できない一面があるように思われる。紙幅の関係もあり、ここでは一点に絞って見てみたい。

往生院で横笛の訪問を知った滝口は、庵室の障子の隙間から横笛の姿を覗く。それを描かないのは、延慶本と長門本の二本のみであり、こちらでは、横笛の声に胸を震わせたことになっている。さて、この場面は、物語中、最も重要なものの一つと思われる。障子の隙間を通して映しだされる横笛の姿は、あまりに哀れかつ妖艶であり、人々の心を打たずにはいない。この物語の盛行の理由の一つに、この場面を挙げてよいであろう。そして、これを滝口発心譚という視点から見れば、横笛のこの姿に激しく心を動かされた滝口は、この局面を乗り切ることによって、解脱の道へと一歩近づくことになる。その意味で、この場面は、滝口にとって重要な通過儀礼を意味することになる。いずれにしても、この場面は、物語の重要な核をなしている。さて、そこで、諸本のこの場面の本文を、その長きを厭わず引用してみたい。

#### △延慶本▽

滝口入道、破無く思し女の音と間に、胸騒ぎ、書き暮らす心地して、馳り出、見ばやと思へども、「さては仏に成なむや生死の紀綱にこそ」と心強く思て、弥変事もせざりけり。

#### △長門本▽

我なく思ひし女の声と間に、胸さわぎてかきくらす心地して、いかにして是までおはしたるぞと云て、走出ばやと思ひけれども、さては仏

に成らん哉。生死のきつなにこそと心づよく思ひて、いと門をどちて返事もせざりければ、

#### △盛衰記▽

滝口入道是を聞き、誠ならぬ事哉と胸打騒ぎ、障子の間より是を見れば、実に横笛にぞ有りける。色々の小袖に衣引纏ぎ、そよの耳踏きりて、袖は涙、すそは露にぞしをれたる。通夜尋ね侘びたるけしきは、堅固の道心者も心弱くぞ覚えける。(略)出で、物語をもせばや。見えて心をも慰めばやと思ひけれども(略)さては仏道成りなやと思ひ切る。

#### △南都本▽

滝口入道、胸うちさわぎ、障子の隙より見ければ、ねくたれしかみの絶間より涙の露も所せき緑のまゆすみも乱れつゝ、今夜も打とけ寝ざりけりと覚くて、面やせたる気色、尋かねたる有様、誠にいたはしくて、何なる道心者も心弱く成ぬつへし。

#### △覚一本▽

滝口入道胸うちさはぎ、障子のひまよりのぞひてみれば、まことにたづねかねたるけしきいたはしうおぼえて、いかなる道心者も心よはくなりぬべし。

#### △屋代本▽

滝口入道胸打騒ぎ、障子の隙より臨て見は、尋かねたる景氣、誠に労働、何なる道心者も心弱く思つべし。

#### △百二十句本▽

滝口入道、胸うちさわぎ、障子のひまよりのぞきてみれば、寝ぐたれ髪のみまよりも、流るる涙ぞ所狭く、今宵も寝ねやらぬとおぼえて、



面瘦せたるありさま、たづかねたる気色、まことにいたはしく見受ければ、いかなる道心者も心弱くなりつべし。滝口、「いまは出で会い、見参せばや」と思ひしが、「かく、心かひなくしては、仏道なるや、ならざるや」と心に心を恥ぢしめて

△八坂本▽

滝口胸打さわぎ、浅ましさに障子のひまよりみければ、ねくたれがみのたえまより、涙の露ぞとほろせく、こよひ夜もすがらねざりけりとおぼえて、おもひやせたるけいき、尋かねたるありさま、誠に見るもいたはしくて、いかなる道心者なり共、心よわくもなりつべし。

△清涼寺本▽

内より滝口これを聞きて、もし横笛にてあるらんと思ひて、障子のひまより覗きければ、いつしか、おもやせて、柴の戸にそひて、しほくとしたるありさまは、目もくれ心もくれて、あらもなつひきの、いとどくるしき、思ひかなと、問ふにつらさの、涙河、いまの逢瀬のよしなきよ、見ても思ひのいやましに、菩薩の障りなるべしと、心つよく思ひ切り、

△広大本▽

横笛が声と聞くよりも、胸うちさわぎで、障子のひまよりも覗きければ、裾は露、袖は涙にしほれつゝ、まことにたづねわびたる風情にて、あみ戸をたゞきたちそひて、しほくとしたるありさまは、ありし日の面影に、なをまさりてぞおぼえける。見れば目もくれ、心もきえ、いづれを夢ともうつゝとも、おもひわけたるかたぞなき。又思ふやう、此うへは、いであひて、かはる姿を一目見せも見ばやと思へども、心に心をひきとどめ、

以上である。なお横笛草紙については、参看した慶大本・古活字本・波川版ともに広島大学本に近く、これを以て代表とした。清涼寺本のみは、この箇所に関して、やや独自の本文を見せている。

さて、ここに掲げた本文は、いずれも表現レベルでの相互的な響き合いを感じさせるものである。もとより、これだけの引用で、相互の依拠関係を特定できるものではないが、本文流動の微妙な位相を示すには足りるであろう。即ち、諸本の複合的要素を持つ盛衰記の本文を基準として示せば、右の用例中、延・長を除き、いずれも「障子の間より是を見れば」の類句を持ち、この句を示さない延・長も、清涼寺本を除く他本が持つ「滝口入道（略）胸打騒ぎ」の類句を持っている。また「さては仏道成りなんや」の句は、「さては仏に成なむや生死の紀綱にこそ」の形で、延・長に見え、さらに語り本系の百二十句本にも「仏道なるや、ならざるや」と響き合っている。また、「通夜尋ね侘びたるけしきは、堅固の道心者も心弱くぞ覚えける」の類似文は、南・覚・屋・百・八の平家各本に見られ、横笛草紙では、「まことにたづねわびたる風情にて」（広）以下、類似文を持つものの、これを「ありし日の面影に、なをまさりてぞおぼえける」と受けている。また、「袖は涙、すそは露にぞしをれたる」の句は、広大本横笛草紙に類句が見られる。また、「出でゝ物語をもせばや。見えて心をも慰めばやと思ひけれども」の類句は、延・長・百・広の各本に見られる。そして、盛にない「寝ぐたれ髪のひまよりも」（百）云々の句は、南・八に類句が見られる。

ざっとこんな具合である。もちろん相互に類縁関係の密なもの、疎

遠なものという相違はあるが、この場面の表現が全体として糾える縄のごとく、一筋に繋がっていることは容認されてよいであろう。そして、さらに思うべきは、その異同の微妙さであり、それぞれが、その前提をなす本文を継承しながらも、そこに注ぎ込んだ表現への意欲ともいうべきものである。中世説話の伝承形態の一つの有り様がここに見られるといったら、それは大仰にすぎるのかもしれないが。

#### 四 物語の鉱脈

最後に、これまであまりふれてこなかった盛衰記と長門本の横笛説話を瞥見しておきたい。盛衰記と長門本の横笛説話は一種の類縁関係にあるといつてよい。いま両書の構成を示すと次のようである。

△盛▽

1 滝口、横笛を見初め、恋仲となる。

2 父茂頼これを知り、滝口を諫める。

3 滝口十八にて出家、法輪寺に隠棲。

4 横笛、法輪寺虚空蔵で通夜、滝口との再会を祈る。

5 横笛、滝口にすげなく追い返される。

6 横笛、桂川に身を投げ、十七歳

△長▽

1 滝口、横笛を見初め、恋仲となる。

2 父茂頼これを知り、滝口を諫める。

3 滝口十八にて出家、往生院に隠棲。

4 横笛、三条の宿所を尋ね、投げ出された扇歌により滝口の出家を知る。

5 横笛、法輪寺虚空蔵で通夜、滝口との再会を祈る。

6 虚空蔵菩薩の示現で滝口の居所

ではなくなる。

7 滝口、その場に駆付け、横笛を茶毘に付す。

8 滝口、骨を拾い、諸国行脚、骨を所々に納める。

9 滝口、高野奥の院に卒都婆を建て、宝幢院梨坊に住む。

を知る。

7 横笛滝口にすげなく追い返される。

8 横笛、桂川に身を投げ、十七歳ではなくなる。

9 滝口、その場に駆付け、横笛を茶毘に付す。

10 滝口骨を拾い、高野奥の院に上る。

右の対比からその類縁性を指摘することは容易であろう。そして、盛衰記と長門本の本説話は骨格をほぼ同じくすると同時に、細部においても通じ合う点が多い。たとえば、冒頭で、苺萱と横笛の名を出し、苺萱の相手を越中前司盛俊（長門本は越中次郎兵衛盛次）とする点。横笛の出自を神崎の遊君の娘とし、これを清盛が福原からの上洛の時、召し連れて、建礼門院の宮中に進上したとする点。出家を決意する滝口の心中表現の類似。滝口の庵室を尋ねる横笛が法華経提婆品を読む声でそれと知る箇所。横笛の入水を十月六日のこととする点等々。これらを以て考えると、その細部における異同にもかかわらず、両書の取材源は非常に近いものと考えられる。そして、それは、室町物語の横笛説話にきわめて近いものといえる。というのも、横笛草紙と盛・長は、意外に表現のレベルでの近似値が高く、盛・長の本文は、一見、横笛草紙のそのの簡略化、あるいは梗概化的様相を呈しているからである。しかしながら、それは、両書が、直接現存するとき室町物語の横笛草紙の世界にその材を仰いだものということではないであろう。むしろ、これらの基盤に横たわる物語の鉱脈ともいう

べきものを想定する必要があると思われる。そして、そのことは、さらにやや異質な展開をみせる延慶本の本話との関係をも含めて、中世における物語の一筋の流れを推測せしめるものである。

## おわりに

近代の日本画家、村上華岳に「日高川」という一幅の絵がある。その画題から推測できるように道成寺縁起に材を採ったものである。日高川を前にして立つ美しい清姫の姿を描いたものであるが、その足はいまにも、宙に浮き立ちそうであり、その眼は、前方を注視しているようでありながら、その実にも見てはいない。その魂はすでに、はるか彼方をさまよっているのである。まさに△あくがる▽女を描いて見事というべき作品である。

しかし、これは村上華岳の絵画にとどまらず、日本の文芸において、一つの流れを形成するモチーフであると思われる。その意味で、中世における諸種の横笛説話が、一様に庵室の障子の隙間から見える横笛を描くのは、これが一種ビジュアルな感覚で以て捉えられ、この物語の盛行に大きな寄与を果たしたことを窺わせるものであると思われる。横笛が△あくがる▽のは、その△恨み▽、△深き思ひ▽故であり、この物語が、横笛その人を主題として据えた時点（たとえば延慶本の示す本説話はその前段階の一つの形態を示すものであろう）から、それは一貫していると思われる。

## △注▽

- (1) この物語の発生については、はやく筑土鈴寛が、高野念仏聖との関わりを説き（『復古と叙事詩』青磁社 昭17）、以後諸氏によって同様の指摘が繰り返されている。
- (2) 松本隆信「御伽草子の本文について―小敦盛と横笛草子―」（『中世庶民文学―物語草子のゆくへ―』所収、汲古書院、平1）。
- (3) 神野藤昭夫「横笛草紙の成立まで―室町時代物語論のために―」（『日本文学』昭52・2）。
- (4) 岩瀬博「滝口横笛説話考―平家物語と御伽草子をめぐって―」（『伝承文芸の研究』所収、三弥井書店、平2）。
- (5) 佐々木八郎『平家物語講説』（早稲田大学出版部 昭25）。
- (6) 服部幸造『平家物語』滝口出家譚」（『松村博司先生喜寿記念国語国文論集』右文書院、昭和61）。
- (7) 拙稿「滝口発心譚―延慶本平家物語の△特異▽な手法をめぐって―」（『青須我波良』46号、平5・12）。
- (8) 勝浦令子「女の発心・出家と家族」（峰岸純夫編『家族と女性』所収、吉川弘文館、平4）。
- (9) 引用は『室町時代物語大成』第十三により、ひらがなを漢字に改める等、読みの便宜をはかった。
- (10) 引用は『室町時代物語大成』第十三により、ひらがなを漢字に改める等、読みの便宜をはかった。
- (11) 引用は岩波古典大系により、カタカナをひらがなに改める等、読みの便宜をはかった。
- (12) たとえば、五来重「庶民信仰における滅罪の論理」（『思想』昭51・4）参照。
- (13) 読み本系平家物語、ことに盛衰記・長門本の横笛説話は、室町物語の示す内容と関係が深いと思われるが、この点については後述する。
- (14) 福田晃「赤城山縁起の生成」（『神道集説話の成立』所収、三弥井書店、

昭59)。

- (15) 伝承文学資料集成『室町期物語一』(三弥井書店、昭42)に翻刻された広島大学本「横笛草紙」に付された解説。
- (16) 今昔物語集卷三一「尾張国匂の経方、妻の事夢に見たる語第十」。
- (17) 岩瀬注(4)の論文。

八付  
▽

右に注記した以外の本文の引用は、長門本は国書刊行会本、盛衰記は通俗日本全史版、覚一本は岩波古典大系、百二十句本は新潮古典集成、延慶本は勉誠社翻刻本、八坂本は国民文庫本、南都本は汲古書院影印本、屋代本は新典社翻刻本、広大本は伝承文学資料集成『室町期物語一』による。